むかし、夫の西川利夫さんが出征されたときの思い出である。家を出るまえに「ふるさと」をハーモニカで吹いたというエピソードは、その時代の精一杯の青春性で、半世紀たっても忘れられないドラマだったのだ。

同じむき同じ間隔に飛ぶ雁よ茜にそまる山の端を背に　石原美智子

じっさいに見た場面というより、写真か絵を見ているような、どこか人工的な、あるいは図形的な映像になっているところがポイント。じっさいに見た場面をそのまま描くのではなく、画家が自分の個性を表現するために見た世界を再構成するように、である。

几帳面な父なれば箱ぴったりと封されてみかん汗かいており　新留紀代美

実家の父から送られてきたミカンである。箱を開けるとミカンたちが、いっせいに「ホーッ」と息を吐いたような、ユーモラスな場面が目に浮かぶ。

一キロの生姜切り干し大根と秋から冬は刻んでばかり　森川陽子

一キロの生姜はどのくらいの量なのか、切り干し大根用には何本ぐらい大根を刻むのか、私にはまったく分からない。が、秋から冬へという太い季節感が、野菜を洗う水の冷たさを連れてきて、台所仕事の現場をイメージさせてくれる。

カーディガンに身を包ませていれば我しみじみ患者なんだと思う　安野ゆり子

この歌について「自らの境遇を客観視する、あっけらかんとした切なさが刺さる」と書く「選歌ルーム」の谷岡亜紀の指摘に賛成。内側からではなく、外側から自分を確認する仕方が、なるほど、じつに「あっけらかん」としている。

古希のボクは日本に帰れると信じてたパンくずリストをたどっていけば　石田郁男

「パンくずリスト」というウェブ用語をつかって、長いフランス生活の積み重ねを、シンボリックに表現した工夫に感心した。こまごましたことの積み重ねに、それぞれ原因・結果があるはずなのだ。ここまで来た複雑な時間をツリー構造になおせば、ということなのだろう。

東京に飛騨の匠の血筋引く手先の器用な幼子育つ　桐谷文子

作者の祖母に当たる人が、飛騨の匠の娘さんだったとする歌がある。歌中の「幼子」は作者とどういう関係なのか。作者の孫かもしれないが、そんなことは分からなくても歌の理解にはさしつかえないだろう。下句、簡潔で、うまい。

大寒の朝の窓辺をあかくするわが背戸山のモルゲンロート　斎藤佐知子

「モルゲンロート」は、もともとは登山用語で、早朝の太陽光に照らされて山肌が赤く染まる現象のこと。なんとなく華やかなこの語を使って、朝窓全体を真っ赤に染める山を讃美する一首。ここでの「背戸山」は固有名詞ではなく、一般名詞で、背戸（家の裏口）の山の意味だろう。